
Soldiers Of Savior

萩川 沙文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Soldiers Of Savior

【Nコード】

N3039B

【作者名】

莉川 沙文

【あらすじ】

雪の中、動けなくなったりリンを助けたのは一昨日来たばかりの救世主様。しかも、泣き虫でまだ子供。「救われるか？魔族に滅ぼされるのか？全てはこの子供にかかっている。」人々を救うために、リンと救世主ミズキは世界を救う旅に出る。SOS、リンバーション

第一章 出会い

寒い。

手足はほとんど感覚が無く、動かそうにも動かない。
白い地面に横たわった体に、綿雪が降り積もっていく。
どうしてこんな事になったんだろう。

答えは簡単だ。

剣が折れた。

だからモンスターに襲われてもどうしようも無かった。

手足が動かないのは、寒さだけが原因ではないのかもしれない。
もう痛みすら感じないから、自分がどの程度の怪我をしているのか
さえわからない。

薄れていく意識の片隅に、雪を踏み締める足音が聞こえた気がした。
またモンスターだろうか。

シンと静かなこの場所は、雪の降り積もる音まで聞こえてきそうだと。
耳を澄ましてみると、足音はこちらに近付いてきているようだった。

- ザクツ

足音が真横で止まった。

温かいものが額に触れて、私は閉じていた目を開いた。

「駄目だよ。食べちゃ駄目。生きてるし、人間だよ。」

まだ声変わり前の男の子の声がそう言った。

私の視界に映っているのは、ピューナという移動用に品種改良された動物のドアップだけれど。

ピューナは少し考えるように私を見て、スツと頭を引いた。

ピューナの背中から飛び降りた声の主は、着地したとたんにちよつとよろけた。

10歳くらいだろうか。

髪と瞳は黒くて、肌は白い。

変わった色だ、と思った。

腰に携えた、その体には少し大きすぎる剣がキラリと輝いたように見えた。

「怪我をしてるんですか？」

男の子はそう言って私の横にしゃがみ込んだ。

「そうみたいだね。」

私が高まるで他人事みたいに答えると、彼は少し難しい顔をした。

「こんな所にいたら死んじゃうよ。町まで行こう。」

男の子はそう言った。

「そうは言っても動けなくてね。」

そう。声が出るのが不思議なくらいだ。唇も凍り付いたように感覚が無い。

それに、恐ろしく眠い。

「ジーク、この人を背中に乗せてあげて。」

男の子はピューナを振り返ってそう言った。

ピューナは私をやりわりとくわえると、その広い背中に横たわらせた。

でも、いくら広いからって私が一人寝たらもう座るようなスペースは無い。

「馬鹿だね。あんたはどうするんだよ。」

動けないまま空に向けて私は言った。

「僕は大丈夫。ね、ジーク。」

男の子はそう言った。

ピューナはブルルとひとつ鳴いて頭を下げた。

そしてゆっくりと上げたその頭の上に、男の子は乗っていた。なるほど。

まだ軽いからかって遠く思った。

「さっきの町へ戻ろう。」

男の子はピューナにそう言った。

ピューナはゆっくりと歩き出す。

その長い毛並みが温かくて、少しずつ体が温まってきた。

「僕はミズキ。救世主だなんて言われて一昨日この世界に飛ばされて来ちゃったんだ。」

男の子はピューナの頭の上に後ろ向きに座って言った。

「私はリン。そうか、あの不気味な太陽はやっぱりそういう事だったんだね。」

そうだ。

一昨日といえば、伝説とか言い伝えてしか知らなかった黒い太陽が昇った日だ。

闇の封印が解かれた証だと聞いた。

同時に、救世主が現れると。

「それで、僕を呼び出したお爺さんが、とにかく西に進めって。いつか必ず真実にたどり着くからって。」

ミズキはそう言って眉をしかめた。

「でもさ、西だったってずーっと行ったらまた、ふりだしに戻っちゃうと思わない？」

「ぷっ…ははは」

思わず吹き出すと右腕がズキンと痛んだ。

ミズキは急に笑い出した私に驚いたのか、ポカンと口を開けたままこっちを見ている。

「確かにそうだね。ぐるっと一周しまっちゃ意味がないや。」

体が温まってくると、少しずつ体が動くようになってきた。

どうやら手足は動くから、怪我をしているのは右腕だけらしい。

少し体を動かしたら、右腹部がズキンと疼いた。

肋骨にひびくくらい入ってるのかもしれない。

「あんだ、西に行くとか何があるのか知ってるのかい？」

キョトンと私を見つめるミズキの黒い瞳をしつかり見て言った。

「うっん、知らない。お爺さんは何も教えてくれなかった。」

ミズキは首を振ってそう答えた。

思わず吐いた溜息は、ピューナの威嚇の声で掻き消された。

「な…何コレ…」

ミズキの目がゆらりと不安に揺れた。

左腕についてなんとか体を起こすと、グレーに鮮やかなスカイブルの混じった毛並みが目に入った。

「こいつらまだ居やがったのか。」

ついさつき、折れた剣でこっぴどくつつちめてやったのに。

「お…狼？でもこんなに大きかったつけ？」

ミズキはオロオロとそんな事を呟いた。

再び吐きかけた溜息を飲み込んでピューナの背中座ると、右腹部から強烈な痛みが全身を走った。

詰まった息を深く吐き出す。

ミズキの腰には剣があるけれど、この調子だととても戦えるとは思えない。

「こいつはアイスウルフ。あんたの言う通り狼の一種だった。今じや闇の術にやられてすっかりモンスター化しちゃったけどね。」

言いながらピューナの背中を下りる。

足はしっかりと雪を踏む感触を感じてくれた。

これなら、なんとか動けそうだ。

刀身が半分になってしまった剣を抜く。

「いいかい。あんたは町へ戻るんだ。」

ピューナの頭から背中を下りて来たミズキに言った。

「え？でも…」

ミズキは戸惑ったように私を見た。

視線はだらりと垂れ下がったままの右腕に注がれている。

「私は左利きだから大丈夫。それよりあんたと、そのピューナにやつてもらいたい事があるんだ。」

私はアイスウルフに向けて剣を構えた。

「僕に出来ること？」

ミズキが小さくそう言った。

「そうさ、よく聞いて。町の入口の門入ってすぐ右側にイースソルジャーの詰所がある。ドアを3回ノックしてこう言うんだ。『リ

ンが魔族にやられた。イスの剣が折られたんだ。』」

ミズキは一度口の中で復唱して頷いた。

「わかった。すぐに戻ってくるから。」

ミズキがしつかり掴まったのを確認したピューナは、一度ブルリと体を震わせて走り出した。

あの早さなら町まで2分はかからないだろう。

5分防げばなんとかなる。

アイスウルフはじつと姿勢を低くして、こちらの様子を見ている。温まった体が脈打ったたびに、腕と腹部が痛みを訴えてくる。

それをごまかそうと唇を噛んだら、口の中に血の味が広がった。

どうやら噛み切ったらしい。

ジリツとアイスウルフが一步前に出た。

合わせるように一步下がる。

一匹二匹なら半身の剣でも何とかなるけれど、ざっと見て5、6匹はいそうだ。

それに、コンディションが完全に不利だ。

降り積もる新雪に足はとられるし、何しろ怪我が痛すぎる。

ジリジリと間を詰めてくるアイスウルフとの間合いを、なんとか詰めないようには後ずさってはいるけれど、このまま5分はもたないだろう。

「あつ……」

雪に足を取られて一瞬躓いた。

そのすきを狙ったアイスウルフは、うおんと一声鳴いた後、次々に襲い掛かって来た。

一匹目、二匹目を剣でなんとか薙ぎ払う。

次の攻撃に備えて剣を構え直した時、右腹部が悲鳴を上げてミシリと音をたてた。

「いつ……!」

思わず体を折ったその隙に、私は再び地面に転がされたらしい。

視界がグルグル回って、どっちが上でどっちが下かわからなくなる。

強い獣の臭いがする。

首筋に痛みが走って、私はまた声を上げた。

「いっつ…！ああ…！」

意識が混濁する。

このままじゃマズイってわかってるのに、体はもう私の意思に従ってはいけない。

「退きやがれ！この犬ころども！」

聞き慣れた声が降って来て、不覚にも安堵の笑みが零れた。

これで、町にこいつらが入り込んだりはなくて済む。

体の上に乗っていた重みが不意に退いた。

「だ…大丈夫？しっかりして！」

ミズキの声だ。

「おらリン！国の一大事だぞ！死んでる場合じゃねえだろ！」

そう言われて、いつの間に閉じていた目を開いた。

「うるさいねゾーン。あたしゃアンタみたいに丈夫じゃないんだよ。」

「

返すと、少し離れた所でゾーンが笑ったのがわかった。

「それくらいの口がきけるなら大丈夫だな。」

「おかげさまでね。」

そう言って笑って見せると、ミズキが私の横にペタンと座り込んだ。目を向けると、その顎から透明な水がポタポタと零れていた。

「馬鹿だねあんた。何を泣いてるんだい。」

なんとか手を持ち上げて、その雫を拭ってやる。

出血で余計に血の気の引いた冷たい指先を、温い水が解かしていく。

「だって、血が…」

ミズキは途切れ途切れにそれだけ言った。

「おいボウズ。泣いてる場合じゃねえぞ。」

ゾーンが言った。

アイスウルフは早くも全滅したらしい。

いつの間にかミズキの横にいて、その無駄にでかい手でミズキの黒

髪をくしやりと撫でた。

「本当に魔族がここまで来てたのか？」

ゾーンは私を見て言った。

「ありや間違いないね。こっちの人間じゃなかった。あんな凶暴な魔術、あいつらしか使いやしないよ。」

そうだ。

辺りの雪を溶かし尽くす程の炎術だった。

人を傷つける為の、相手の動きを制止させる呪文。

身動きのとれない相手に放つ、容赦無い魔術。

「ゾーン、あんたは先に城に行つてボンクラ騎士団長様に伝えておくれよ。魔族がこの近くまで来てるってさ。」

ゾーンは頷いた。

「じゃアリンさんは町へ行こう。病院とかあるんでしょう？」

ミズキが言った。

私は一つ息を吐き出すと、その頭をポンポンと撫でた。

「あんたは西へ行かなきゃならないんだろ？それが救世主様のすべき事だし、やらなきゃならない事なんだろ？救世主様に手間は取らせないよ。」

ミズキはやつと泣き止んで真っ赤に腫れた目を、また潤ませて言った。

「でも、そんな怪我じゃ…ジークに乗つて行つたほうがいいよ。」

その言葉に同意するようにピューナがブルルと鳴いた。

「そのボウズの言う通りにしな。救世主様だか何だかしらねえが、女一人助けられねえのに世界なんざ救えるわけねえだろ。」

ゾーンの言葉にミズキはパツと顔を輝かせた。

「そうだよ！僕がここに来て初めてする人助けだよ！ね？いいでしょ？」

その嬉々とした顔に、言い返す気も失せた。

「そいつは光栄なこつた。」

言つて苦笑すると、ミズキは鼻をズズツとすすつてにつこり笑った

の
だ。

第二章 アスリルの町

ピューナの背中の上は、温かくて心地いい。

揺れもほとんど無いから、じっとしていれば傷が痛む事も無い。

「あんた、いきなりこんなところに呼び出されて救世主だなんて言われて、嫌じゃないのかい？」

ピューナの頭に座って、前を見ているミズキに聞いた。

ミズキは顔だけ振り返って言った。

「嫌だけども、真実を見付けなきゃ元の世界に戻れないって言うんだもの。」

ちよつとむくれてそう言ったミズキに、今日何度目かの溜息を吐き出した。

「だからって、一人でなんて無茶だよ。町の外にはモンスターがうようよしてるんだよ。」

どうなっていたんだろう。

ミズキ一人の時に、あの飢えた獣達に遭遇していたら。

「外は危ないからって、この剣をくれたんだ。」

ミズキはそう言って腰の剣に触れた。

こうして近くで見ると、かなり凝った装飾のしてある剣だとわかる。

「剣の構え方は知ってるのかい？」

その黒い瞳を覗き込むように言うと、ミズキは首を横に振った。

「ったく。とにかくそのまんまじゃモンスターに食われて世界を救うどころじゃないね。」

言うと、ミズキは肩を落とした。

「うん。さっきも何も出来なかった。」

「怪我を治してさ、剣をもらったら私が教えてやるよ。」

思わず口をついて出たのがそれだった。

ミズキは目を見開いて、窺うように私を見た。

「本当？」

ミズキの問い掛けに反応するように、その腰の剣がまたキラリと輝いた。

「助けてもらっちゃったからね。礼のかわりでさ。」

ミズキはやった、と言って無邪気に笑った。

それと同時に、町の門をくぐったのがわかった。

町の賑わいが聞こえてくる。

「真っ直ぐ行くと左側にボロい教会があるから、そこまで行つとくれよ。」

私が言うと、ミズキのかわりにピューナがブルルと返事をした。町のほぼ中心にある教会は、相変わらずボロボロだ。

今日も親切ぶってここの教会の神官に取り入るうとしている馬鹿な男どもが、屋根から雪を下ろしては修理をしているのが見えた。その中に知った赤毛を見つけて声をかけた。

「よお。今日も精が出るね。」

ピューナの背中に横たわったまま言うと、赤毛のザインはこっちを振り返った。

そして、危つく屋根からずり落ちかけた。

「ばっかやる。お前またスゲー怪我して。」

言いながらあたふたと梯子をおりてくる。

あんまりおかしくて笑いを堪えると、体中がギシギシと痛んだ。

「笑ってる場合じゃねえだろ。」

ザインはそう言って頭を抱えた。

「あの子を呼んでくるか、私をあの子の所に運んでやってくれると有り難いんだけど。さすがにピューナのままだと床が抜けるだろ？」

言うと、ザインは頷いて私の体をひょいと担ぎ上げた。

「いつ…馬鹿だね。もつと優しく扱つとくれよ。」

ザインは私の言葉に肩をすくめて見せた。

「俺は職人で、力仕事にや向いてないの。」

「はいはい、そいつは失礼しやしたね。」

そう返したら、ザインの後ろでミズキが吹き出した。

「何だいあんだ。楽しそうだね。」

姿の見えないミズキに言うと、ミズキはクスクス笑いながら言った。
「だって面白いんだもん。リンって皆の人気者なんだね。」

思わずザインと顔を見合わせてしまった。

そして、今度はザインが吹き出した。

「ぶっはは！人気者なあ…なるほど。そうかもしんねえなあ。コイツを嫌いだって奴もかなりいるけどな。味方の方が多いのは確かだ。」

ザインはクツクツと笑いを堪えながら言った。

「プライドだけで生きてる貴族連中は私みたいなやつは嫌いだろうよ。」

私が言うと、高く澄んだ声がそれに答えた。

「リンさんは身分が高いイスソルジャーのお一人なのに、私たちのような下の人にも同じように接して下さって。皆、本当に頼りにしております。」

声のした方に顔を向けると、ビラビラした神官服を着込んだ町のアイドル神官、ミリュが立ち上がったところだった。

首を動かしたから、アイスウルフに噛まれた傷が引き攣れて痛んだ。
「それよりもどうなさったんです？リンさんほどの方がそんな怪我

…」

ミリュはそう言いながらベットの毛布をめくった。

そこに横たえられる。

「剣がちよつとね。私が油断してたんだよ。」

ミズキが何か言おうと口を開きかけたのを見て、それを遮るように
そう言った。

ミズキが黙って私を見たから小さく頷いて見せたら、ミズキも頷き返してくれた。

頭のいい子だ。

「怪我を治しますね。じつとしていてください。」

ミリュはそう言っで私の額に手に乗せた。

口の中で呪文が何かを紡いでいるようだけれど、何を言っているのかまでは聞き取れない。

じつと目を閉じていると、額から全身に熱が駆け抜けた。

次の瞬間には傷の痛みはすっかり消え去っていた。

「はい、これで終わりです。何か違和感はありませんか？」

ミリュは天使のように微笑んでそう言った。

「ありがとよ。やっぱりあんたはイースで一番の神官だよ。」

右腕を何度か回してそう言ったら、ミリュは顔を赤らめた。

「そ…そんなこと…」

私は笑ってベットから起き上がると、床に膝をついたままあたふたしているミリュの頭においた。

「町の近くまでアイスウルフが来てる。夜はちゃんと戸締まりをして寝るんだよ。見回りは強化するけど、何かあったらすぐ呼びにおいで。」

ミリュは神妙な顔をして頷いた。

「さて。」

言っでミズキを見る。

「治ったの？」

真ん丸い目を更に丸くして、ミズキは言った。

「そうか。あんたのそこにはこういうのも無いのかい？」

聞くと、ミズキはブンブンと首を縦に振った。

「道すがら話してやるさ。ひとまず城に行っで剣をいただかないと商売あがったりなんでね。」

言っで、ミズキは一瞬戸惑ったように目を泳がせた。

「お城なんて…僕が行っで大丈夫？」

その言葉に思わず笑った。

「大丈夫さ。城内は微妙だけど、王都は誰だっで入れるよ。」

ミズキは私を見て、ちよつと考へた後頷いた。

「それに、城まではちよつとあるからね。あんたのジークに乗せて

ってもらつとかなり楽なんだよ。」

言つて舌を出して見せたら、ミズキはやつと安心したように微笑んだ。

「じゃあ、くれぐれも気をつけるんだよ。」

ミリュにそう言つてピューナの上に飛び乗った。

「お気をつけて。」

ミリュはそう言つて手を振った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3039b/>

Soldiers Of Savior

2010年10月17日05時05分発行